

# 歴史の中の 女たち

## 第35回

### ガブリエラ・ミストラル (1889～1957年)

—チリのノーベル賞詩人—

伊藤 滋子

チリに最初のノーベル賞をもたらしたガブリエラ・ミストラルは本名をルシラ・ゴドイ・アルカガヤといい、チリ北部の町ビクーニャに生れた。母のペトロニラは美しい人でこの時42才、未婚のまま生んだミストラルの異父姉にあたるエメリーナという14才の娘がいた。父ヘロニモは教師で母よりも10才以上年下であったが、かなり強引にペトロニラと結婚してルシラが生まれたものの、単身アンデス山中の小さな村に赴任すると音信が途絶えがちとなり、ついに家族を捨てて出奔してしまった。残された母子家庭を支えたのは姉のエメリーナで、教師となった彼女は母と妹を連れてビクーニャからさらにアンデスに奥深く入ったモンテ・グランデに赴任し、ミストラルは3歳から9歳までをそこで過ごすこととなった。男は鉱山で、女はぶどう畑で働き、金持ちなどいないその寒村が、後年『エルキの谷』『モンテ・グランデ』として、国外に住むことの多かったミストラルの心の故郷となる。豊かな自然に囲まれた中で母と姉の愛情を一身に受けながらのびのびと暮らすことができたこの時期は、苦しいことの多かった彼女の人生の中で唯一の輝かしい思い出に昇華し、母への愛とともに、彼女の生涯を支えることとなった。

しかしこれまで彼女を庇護し、導いてくれた姉が他の村に転勤することになり、母とともにビクーニャに戻ったミストラルは生涯忘れられない出来事に遭遇する。だれもが貧しく、人々が肩を寄せ合いながら生き



<http://voicededucation.org/node/58>

ていたモンテ・グランデとは違って、大きい町のビクーニャでは母子家庭に対する世間の風当たりは冷たく、学校にはこれまで彼女を庇護してくれた姉もいない。その出来事とは学校で管理を任されていた紙がなくなり、彼女が盗んだと断罪した盲目の女教師にけしかけられた級友たちから広場で石を投げられたことだった。十代に入ったばかりの少女の心に大きな傷跡を残したこの辱めを彼女は生涯忘れず、不条理を感じるたびに引き合いに出した。しかしもしかしたら、それは彼女の空想のなかで事件が針小棒大に膨らんでいった結果だったかもしれない。彼女は過去を語る時、いつも違ったバージョンを持ち出すので、彼女の生涯には不明な点が多く、謎に満ちている。

このあと母と子はビクーニャからさらに大きな町セレナに移り、彼女は初めて海を見た。そこには父方の祖母が一人で住んでいた。祖母もやはり夫に去られた女性で、大変信心深く、息子ヘロニモを神学校に入れたものの、緑色の目を持ち、ギターやバイオリンがうまく、掛け合いで歌う伝統的な即興詩の名手として人々を魅了した彼は結局神父にはならず、家庭も捨て、放浪の生涯を送った。ミストラルの人生は愛する母よりも、ほとんど一緒に暮らしたことの少ないこの父と重なり合うことの方が多い。

祖母は旧約聖書を孤独な生活の支えとしており、しばしば訪ねてくる孫娘に聖書の物語をしてやり、ミストラルにとって旧約聖書が唯一の書物となった。暗唱できるほどに繰り返して読んだその本は彼女の空想力を育み、さしたる教育を受けなかったその後の彼女の精神形成の基盤となった。当時旧約聖書がある家はあ

まらなかったで、祖母はユダヤ系の人だったのかも知れないが確かな証拠はない。ミストラルの母方はバスコ系とされているが、ケチュア族の血を引くともいわれる。

後年彼女は、初めて読んだ詩は偶然見つけた父の作品で、それが自分の詩に対する情熱を目覚めさせた、と述べている。彼女が詩を作り始めたのは十代になる前だったが、14歳の時初めて作品が新聞に取り上げられ、それ以来よく新聞に掲載されるようになった。ところが、父や姉のように教師になる道を選ぼうとした彼女は師範学校を受験し、一旦パスしながら、その詩のおかげで入学を取り消されてしまう。テーマが死や無常感、孤独などといった、およそ少女に似つかわしいものではなかったことから、学校の専属神父が、このような詩を書くものが教師になれば生徒に悪影響を与える、と言い出したためだ。こうして正式に教師となる道を閉ざされながらも、彼女は生活のために15歳の時からつてを頼りに代用教員として働き、その後18年に及ぶ教師生活に入った。

幸運にも最初に赴任した田舎の分教場では蔵書家の村人の一人が書庫を彼女に開放してくれて、本など買えない彼女の前に世界の古典や文学といった、これまでと全く違った新たな世界が開けた。彼女の詩にたいする情熱も高揚し、様々なペンネームを使って毎月のように新聞に投稿している。ガブリエラ・ミストラルもそのペンネームのひとつで、ミストラルは地中海に吹く風の名だが、人生の後半を転々として過ごした彼女の生涯を暗示するようだ。またこの頃、20歳年上の裕福な男性に淡い恋ごころを抱き、1年半手紙を交わしている。次の赴任地で、鉄道で働いていたロメリオ・ウレタという名門の青年と愛し合うようになるが、その恋が終わって2年ほどのち、別の女性と婚約中だった彼が、友人のために鉄道会社の金を横領して自殺した。その時彼のポケットにミストラルの名が記されたカードが発見されたことから、彼女は大変な衝撃を受けた。そして後にそれをモチーフにした詩『死のソネット』を書き、その詩がチリで最も権威のあるコンクールで最優秀賞を獲得したのは、彼女が25歳の時だった。それ以来、内外の文壇関係者との交友が始まり、彼女の名は徐々に国外でも知られるようになっていった。そのコンクールの審査員の一人だったマヌエル・マガリャーネスとの秘めた愛は断続しながら7年ほども続いたが、彼には妻がいたため複雑なもの

となり、その屈折した感情は彼女の詩作意欲をかきたてたものの、結局不毛の恋に終わった。

本来の職業である教師という仕事にも熱意を傾けた。優秀な教師だった彼女は師範学校には通わないまま21歳で中学校教員の資格試験に合格したあと、チリ国内の北から南にわたる各地を転々として教師として働き、また教育詩という、児童向けの新しいスタイルの詩を書いたが、それは国内のみならず、広くスペイン語圏の教科書の中に取り入れられるようになった。のちにミストラルに次いでノーベル賞を授与されるパブロ・ネルーダも直接の生徒ではなかったが、彼女の導きによって文学の世界に入っていった。後年ミストラルがイタリアで領事をしていた時、共産主義者となったネルーダを領事館内に立ち入らせるなどという政府の命令に反して、彼とは信条を異にしつつも、匿って庇護した。

ミストラルは31歳で首都サンティアゴに新設された高校の校長に抜擢されるが、教師になる専門教育を受けていないことでさまざまな中傷を受けたうえ、学士号を持たないものが教職に就くことを禁止する法律ができたため、やむなく半年で辞職に追い込まれた。だが失職した彼女に思いがけない救いの手が差し伸べられる。チリを訪問中のメキシコの文部大臣ホセ・バスコンセロスが彼女と教育改革について話し合った結果、メキシコ革命後の新しい教育システム構築のために彼女を招聘することを決めたのだ。1922年、32歳のとき、はっきりとマヌエルと決別したミストラルはメキシコに渡った。同じ年、ニューヨークのコロンビア大学で彼女の最初の詩集『荒廃』が出版されて、ラテンアメリカ文学界に躍り出た。その翌年チリで『荒廃』の第2版が出され、また、チリ文部省の審議会は彼女にスペイン語教授の資格を与え、外国での評価が後追いかたちで国内で認められるようになる。ラテンアメリカでは国内で無名だった作家が国外で評価され、逆輸入されるケースが時々あるが、スペイン語を共通言語とすることの強みであろう。2番目の詩集『いとおいさ』がスペインで、3番目の詩集『タラ(大平原)』がアルゼンチンで、そして最後の詩集『ラガール(ぶどう踏み桶)』だけが晩年にチリで出版されていることから、彼女と祖国の関係が分かるというものである。

革命が終わったばかりのメキシコでは農民の真の解

放をめぐしてその教育に力が注がれおり、ミストラルはバスコンセロスの意を受けて農民学校の教師の養成に関わり、女性教育の教科書『女性読本』を著してその一端を担った。2年間にわたるメキシコ滞在中、彼女は当時のスペイン語圏最高の知識人たちと交わることができ、また先住民色の濃いメキシコの風土にふれることによってラテンアメリカに帰属するという自分の立ち位置を深く認識するようになった。彼女のメキシコの教育に対する貢献も大きかったが、自身もメキシコから多くを学び、多大の影響を受けた。この頃スペインで出版された『いとのおしさ』はそれまでのスタイルを一変して、ラテンアメリカの伝統的な子守唄をとり入れた、どっしりと地に足をつけた母たちを謳いあげる禁欲的で清純な詩集である。また彼女のメキシコからのレポートはチリ新聞社を通じてラテンアメリカ諸国の各紙に掲載された。2年間のメキシコ滞在中、メキシコ政府の好意でアメリカ、ヨーロッパを廻って帰国したミストラルはチリ大学から名誉学士号を授与され、教職に戻るつもりでいたが、政府は国際経験を積み、著名人となった彼女をチリ代表の文化人としてジュネーブに本拠を置く国際連盟に派遣した。この時37歳で、以来チリにはほとんど帰らず、残りの生涯を国外で過ごすこととなる。

赴任先のヨーロッパでナチスが台頭する兆しがみえ、ミストラルもそれを憂慮していたが、1927年チリでも軍人イバニェスによる独裁政権が始まり、彼女の政権にたいする批判は先鋭化していった。母が病床についた時、報せを聞いて帰国した彼女はしばらくチリに留まって看病しようとしたが、彼女を快く思わない政府は国際会議への出席を命じて体よく彼女を国外へ追い出した。母が亡くなり葬儀のために帰国したとき、中米の国の大使の席を打診されるが、政権のファシスト的性格に抗議してそれを受けなかったため、政府はその後彼女の新聞への寄稿を禁止し、給与や教師時代の年金まで停止してしまった。彼女はアメリカの大学やラテンアメリカ諸国での講演で生計をたてるが、次のアレサンドリ政権になって領事に任命され、こんどは外交

官としてジェノバ、マドリッド、リスボン、グアテマラ、ニース、ブラジルなど欧米各地を転々とするようになる。

1943年ブラジルのペトロポリスで総領事をしていた時、18歳の養子のジンジン（本名ファン・ミゲル）が自殺した。ミストラルは周囲には彼を甥と説明していたが、実子ともいわれ、同居を始めた時期も判然としない。だが赤ん坊の時からミストラルが愛情のすべてを注いで育てた子供だっただけに、気も狂わんばかりの悲しみようだった。折から健康を損ね、まだその悲しみも癒えない1945年11月、彼女の元にノーベル賞受賞の報が届いた。それはラテンアメリカ最初のノーベル文学賞で、本来ならそれまで10回以上も候補にあがっていたポール・ヴァレリーが受賞したはずだったが、その直前に亡くなったため、ミストラルの作品

のスウェーデン語翻訳者が熱心に推奨し、急遽彼女の受賞が決まったものだった。授賞式は大戦のために中断されていたのでこの年は3年分合わせて13人の受賞者があった。

受賞後、その賞金でカリフォルニアのサンタ・バーバラに初めて自分の家を買ひ、そこに領事館を開いた。この頃最後の肉親であった姉エメリーナが亡くなり、ジンジンの死後病気がちだった彼女はますます気落ちする。ノーベル賞受賞のあと、彼女はさまざまな国から賞を受けるが、母国チリからはようやく1951年になって国民文学賞が贈られた。しかし授賞式に帰国せず、賞金は故郷の子供たちに寄贈したが、政府はミストラル



スウェーデン王グスタフ5世からノーベル文学賞を授賞されるミストラル  
<http://vidayobradegabrielamistral.blogspot.jp/2010/08/premio-nobel.html>

が愛するモンテ・グランデではなく、生誕の地ではあるが苦い思い出のあるビクーニャに図書館を建てたため、彼女は大いに憤慨する。

1953年、最後の詩集『ラガール（ぶどう踏み桶）』が初めて祖国で出版されるのを記念して生涯で最後となる帰国を果たし、国民の大歓迎を受けた。この時、大統領官邸の前に集まった群衆に挨拶を求められ、バルコニーに姿を現した彼女はとうとう大統領の農業改革の功績を讃えたが、その内容は明らかにメキシコと混同していた。側にいた大統領府の役人は袖を引いて注意をうながしたが、彼女はまったく意に介さず、



そのまま演説を続けた。この時の大統領は26年前に彼女を追い出したイバニェスだったからあてつけとも取れるが、彼女は故意にそうしたわけではなく、単なる思い違いだったようだ。この時は特にひどかったとしても、彼女の演説が間違いだらけだったり場違いだったりするのは有名なことだった。話すべき時に黙り、黙すべき時に話したりすることもよくあった。また、服装に無頓着なこともつとに知られている。あるラテンアメリカの外交官はまだミストラルのことをよく知らないまま、話題の人である彼女をパリで一流のレストランに招待したのだが、現れたミストラルは農婦そのものといったいでたちでしかも大柄だったから周囲から浮いている事が余計に目立ち、いつも妻を最新モードで着飾らせている彼は隠れてしまいたい

ほど恥ずかしかったという。だがそのプロレタリアのような肉体に宿るのは誇り高い貴族精神であり、彼女が祈るのはいつも他人のためだった。それは裸足の子供やアンデスの先住民だったり、迫害されるユダヤ人だったりする。彼女が最後に署名したのはハンガリー動乱の鎮圧に対する抗議だった。ミストラルは1957年、アメリカのロングアイランドで67歳の生涯を終えた。ミストラルの関連書としては芳田悠三氏著の伝記『ガブリエラ・ミストラル - 風は大地を渡る』(JICC出版局 1989年)が読み物としても面白く、詩の翻訳は田村さと子氏が多数手がけておられる。

(いとう しげこ)

### ラテンアメリカ参考図書案内



#### 『一粒の米もし死なずば』

深沢 正雪 無明舎出版 2014年月 219頁 1,900円+税

1908年に日本からの最初の組織的なブラジル移民が笠戸丸で入ってから5年後に、食糧が不足していた日本に米を供給することを夢見たイグアッペ植民地が拓かれた。サンパウロ市南西約200kmに設けられたこのレジストロ地方の植民地建設には、桂 太郎はじめ明治時代の政治家や実業界の大物も関わった国策でもあったのである。だが、試行錯誤した米作はうまくいかず、34年にセイロン島からこっそり持ち込まれた紅茶により戦後ブラジルでの「紅茶の都」といわれるまでに至ったものの、20世紀末から今世紀に入って為替の変動により国際競争力が衰え、現在では一貫生産茶家は天谷製茶だけになったという、波瀾万丈の歴史があるのだが、なぜか公式日本移民史ではこれまであまり言及されてこなかった。

本書はサンパウロの邦字紙『ニッケイ新聞』の編集長が、日本移民のレジストロ地方入植100周年を迎えたのを機に、100超の文献資料に目を通し現地に足繁に通って、同紙に9か月間にわたって連載したルポルタージュ127本を集大成した、波瀾万丈の苦闘の歴史とその百年後の到達点までの気骨ある明治の日本人南米移民史の舞台裏にせまる労作。

(桜井 敏浩)



『ラテン・アメリカ社会科学ハンドブック』

ラテン・アメリカ政経学会編 新評論 2014年11月 293頁 2,700円+税

ラテンアメリカの政治・経済・社会分野の研究者によるラテン・アメリカ政経学会 (JSLA - 現在会員数約 150 人) が創立 50 周年を迎えたのを機に企画された包括的な概説書。26 人の執筆者がそれぞれの専門を活かして 1. マクロ経済の安定と成長、2. 経済開発の戦略と持続性、3. 社会的公正、4. 国際関係、5. 民主主義の諸相、6. 社会的排除と包摂、7. 市民社会と社会運動、8. 人の移動の 8 章 24 項目について解説、それぞれの章毎に文献リストを、また巻末にインターネットでアクセス出来るラテンアメリカ研究ソースのガイドと簡単な人名・事項索引を付けている。

ラテンアメリカの基礎知識を網羅するとともに、この地域の最近の政治、経済、社会に生じている新たな変化の重要なトピックスを分かりやすく解説していて、ラテンアメリカへの理解を助けるまとまった手引きになっている。 [桜井 敏浩]



『キューバ革命勝利への道 - フィデル・カストロ自伝』

フィデル・カストロ・ルス 工藤多香子・田中高・富田君子訳 明石書店  
2014年10月 516頁 4,800円+税

『フィデル・カストロ自伝 勝利のための戦略 - キューバ革命の闘い』(明石書店 2012 年) ではフィデルの幼少時代から 1956 年にシエラ・マestra山中でゲリラ活動を開始し、59 年 1 月にバティスタ独裁政権を倒してハバナに入城するまでが書かれていたが、その姉妹編である本書は 1958 年 8 月から 59 年 1 月 1 日のバティスタのドミニカ共和国亡命をもって革命戦争が成就するまでの間の、フェイデルが率いた反乱軍の動きを内部から克明に時系列で記したものである。

武器・兵力でははるかに政府軍に劣る反乱軍が勝利したのは、捕虜や戦場となった地域の住民への配慮、被害を包み隠さず公表することで反乱軍からの発表が政府のそれより真実であると思わせる情報戦術などに因ることを述べ、傘下の指揮官達に出した指令や照会の手紙、演説、戦いの最終段階で行われた政府軍幹部との秘密交渉などの挿話に加えて、指令書、書簡、写真や地図などの一次史料が本文と巻末に付けられており、キューバ革命の指導者自身による貴重な記録である。 [桜井 敏浩]

お詫びと訂正

『ラテンアメリカ時報』2014 年秋号 (No.1408) 掲載「グアテマラにおける中国のプレゼンスの拡大」の 47 頁の図2に校正時の見落としとして誤りがありました。以下のグラフが修正版です。

(協会 Web サイトの「各種資料」→「時報 PDF データ」の本稿は訂正済みです。)

執筆者ならびに読者の方々にご迷惑をおかけしたことをお詫びいたします。

図 2 グアテマラの貿易相手国順位推移 (グアテマラ中央銀行のデータを基に筆者作成)

